

と見るべきなのか、あるいは高校3年間の勉強だけでは十分とは言えないことを示しているのか、注意深い分析が今後必要となろう。

選択科目群による合格者数、合格率の差を調査している大学もある。それによれば、ある特定の科目群を取った受験生の2次試験の合格率、

合格者数が有意の差を持って高くなっているケースがある。ある科目の問題が特に易しく、それを選択したために入学し易くなったとすれば、科目間の平均点、標準偏差の差を適切に補正することも必要となろう。

実技検査・面接・小論文

実技検査

昭和63年度に、一般入試2次試験で実技検査を実施した国立大学は55大学(58%)、60学部(17%)で、前年度と同数(同率)であった。

昭和63年度に報告されているのは、受験機会の複数化による志願者の増加により、丁寧な実技検査を確保するには二段階選抜の導入を考慮せざるを得ないが、学力試験を課する場合の二段階選抜とは顕著な差があるので、区別を要すること(岐阜大教育)等である。

面接

昭和63年度に、一般入試2次試験で面接を実施した国立大学は40大学(42%)、47学部(13%)で、前年度(40大学、50学部)に比べ、学部数が微減した。

面接試験は、医学部で「医師としての適性」

を見るために実施することが多い。また、高等学校長の推薦に基づく入学者選抜においても実施することが多い。

昭和63年度に報告されているのは、学力試験等の他方法による評価との関係等(山梨医大)他である。

小論文

昭和63年度に、一般入試で小論文を課した国立大学は59大学(62%)、101学部(28%)で、前年度(59大学、100学部)に比べ、学部数が微増した。

昭和63年度に報告されているのは、小論文の成績を学力の量的尺度として他科目と合算するのは必ずしも適切でないと判断し、小論文を一般入試からは切り離して推薦入学にのみ課することに变えたこと(信州大経済)、小論文の採点結果の分析(大阪外語大)、課題の選定における留意事項等(佐賀医大)他である。